

# 実技指導研修会報告

|                              |   |
|------------------------------|---|
| <b>実技研修</b><br><b>「モルック」</b> | <b>【講師】</b> 岡本 亮太 (日本モルック協会公認団体 CWP モルック部)<br><b>【場所】</b> 名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス テニスコート場<br><b>【参加人数】</b> 36名<br><b>【記録者】</b> 水藤 弘史 (三重大学) |
|------------------------------|---|

## I. はじめに

共通実技研修のモルックでは岡本亮太先生(日本モルック協会公認団体 CWP モルック部部長)を講師として迎え、本研修会の最初の研修が開催された。岡本先生は、勤務先でも採用面談時や初任者研修においてモルックを用いており、日頃からモルックに慣れ親しむとともに、多様なモルックの活用方法を紹介して下さった。さらに、モルックの魅力やルール、注意点だけでなく、これからモルックが目指す先についても説明され、研修が行われた。以下に、具体的な研修内容を示す。



岡本 亮太氏

ているとのことであった。さらに、今年、モルック世界大会が函館で開催されるとのことであった。

モルックの面白さと魅力について、

- ・コミュニケーションツール
- ・運動苦手も、障がい者(児)も同じ
- ・ルール簡単だけど奥が深い
- ・同じルールで誰とでも仲良く慣れる
- ・道具が比較的安い

ということを挙げられていた。このような特徴から、新入生歓迎レクリエーションや福祉や子どもたちのイベントなど幅広く活用することができ、手軽に値段も安く、続けられる、また、木材を利用して作られているためSDGsや社会問題を考えられるスポーツといえると紹介された。

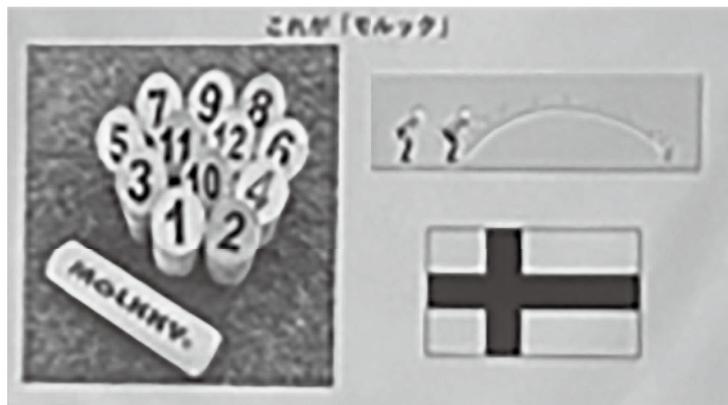
## II. 研修内容

### 1) モルックの紹介

モルックは、フィンランドのカレリア地方の伝統的なキイッカ(kyykkä)というゲームを元に Lahden Paikka社(当時 Tuoterengas社)によって1996に開発されたスポーツである。投げる棒のことをモルックといい、下手投げで行うのが基本となっている。とても簡単なルールで老若男女問わず誰もが楽しめるスポーツである。最近ではサッカー J1や J2の試合開始前にモルックが行われ

### 2) モルックのルール

モルックのルールを簡単に紹介する。モルックと呼ばれる棒をスキttlと呼ばれる1から12の番号が記載された木製のピンに向かって下手投げで投げて倒すスポーツである。モルックは、規則的に並べられたスキttlから2から3m離れたところにモルッカーリと呼ばれる投げる位置を示すものを設置し、その場所から投げることに決められている。あとは、モルックを投げて倒れたスキttlの内容によって得点を加算していき、先に50点になるまで得点した方が勝ちとなる。ただし、50点を超



これが「モルック」

えてしまった場合、25点からはじめることになる。スキットルが複数倒れた場合は、倒れた本数が得点となるが、スキットル同士が重なって地面に着いていない場合は得点に加算されない。また、1本のみ倒れた場合は、スキットルに記載された点数が得点となる。倒れたスキットルは、倒れた場所で立て直し、ゲームが再開される。

チーム内で投げる順番を決め、それぞれのチームが1名ずつ順番に投げていく。同じチームの3名が連続してスキットルにモルックを当てることができなかった場合、そのチームの得点が0点、相手チームの得点が50点となり、ゲームは終了となる。

### 3) モルックの広がりを目指す

日本モルック協会が目指す目標は2つあり、1つは国内で世界大会を開催することであった。これについては、今年度開催されるため、目標を達成したといえる。もう一つは、オリンピック・パラリンピックの正式種目として採用されることであるとのことであった。2011年、日本モルック協会が発足された当時、競技人口は100人であった。その後、「さらば青春の光」の森田氏がモルックの世界大会に出場することからモルックというスポーツが国民に広がるとともに、コロナ禍の影響もありプレイヤーが増加し、現在の競技人口は160万人以上になった。このような競技人口の増加に伴い、キャッチコピーが2022年までは「あした、日本代表になれる、それがモルック」であったが、2023年からは「Smile with you 誰もが一緒に笑顔になれる。それがモルック」へと変わったと紹介があった。

### 4) モルックの注意点

オリエンテーションの最後には、注意点として、間伐材で自分でも作れると思われがちであるが「モルック」「Molkky」は商標登録されており、自分で作ると訴えられるということであった。ぜひ、モルックを行う際は、「tactic社」の製品を必ず使用するようになさってくださいということであった。

### 5) モルックの実践

モルックのゲームを開始するにあたり、今回は、1チーム3人で1コート3チームに分かれた。コートは全て4コートとし、それぞれに得点を記録する記録用紙を配布し、ゲームが始まった。チーム内で順番を決めるとともに、どのチームから投げるか順番を決め、各コートでゲームが進められた。ある程度、ゲームが進められていくと、隣同士のコートでチームの入れ替えが行われ、異なるチームとの対戦を楽しんでいた。

## Ⅲ. 終わりに

実際にモルックゲームに参加してみると、スキットルに当てるのが難しく、人工芝の影響もあり、投げたモルックが予想外の方向へ飛んでいく様子がみられた。また、複数集まっているスキットルにモルックを当てようとして上手くいかず、3回連続0点で負けてしまうチームも複数みられた。非常に奥深く、戦略だけでなく、運も必要ではないかを感じるスポーツであった。

最後に、スムーズな運営にご協力いただきました参加された皆様、参加者が笑顔になってモルックを楽しむ姿になるよう雰囲気作りをしていただきました岡本亮太先生に感謝申し上げます。



研修風景

## 実技研修 「英語で体育実技」

【講師】山内 宏志 (国際基督教大学)  
 【場所】名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス マルチスタジオ  
 【参加人数】14名  
 【記録者】水藤 弘吏 (三重大学)

### I. はじめに

選択実技研修の「英語で体育実技」では山内宏志先生(国際基督教大学)を講師として迎え、山内先生がこれまで初年時教育の一環として実践されている内容や他の研修で実践されている内容で研修内容を構成していただき、さらに全て英語で実践することで研修が進められた。



山内 宏志氏

### II. 研修内容

#### 1) Introduction

マルチスタジオに入室してきた参加者は最初に、ネームタグ作りから行った。養生テープにマジックインクを用いて呼ばれたい名前をアルファベットで記載し、胸の前に貼り付けた。その後、山内先生から、「今から、この研修内容が終わるまで全て英語で進めます」と、宣言され、「英語で体育実技」が始まった。

ウォーミングアップとして、各自、名前の紹介とどのように呼んで欲しいかを伝える(Call me ~)ことを行った。

#### 2) Encounter and Sharing

出会いと共有ということで、名前を呼びながらボール

をパスする簡単なゲームが行われた。

- ・座ったまま目が合った相手の名前を呼びボールをパス
- ・歩きながら目が合った相手の名前を呼びボールをパス、パスを受け取ったらお礼を伝える(Thank you ~)。
- ・ジョグしながら3秒以内に相手の名前を呼びボールをパス、パスを受け取ったらお礼を伝える

次に、Clap & Gather というゲームを実施した。Clap と言いながら手を叩き、Gather といった際に、これまで手を叩いた数で集まるというゲームである。まずは2人組、3人組で集まり自己紹介(出身地など)、そして、6人組で集まり相手の情報(好きな食べ物など)を聞き出し、情報共有が行われた。そして円を作り、足元にマーカーを置いた状態でフルーツバスケットのようなゲームで、1人だけマーカーが置いていない状態でその人が「Have you ever ~ ?」と参加者に尋ね、当てはまる人は移動するということが行われた。Magic word を「Meijo」とし、これが発せられたら全員が移動するというルールも追加されていた。なお、移動は全て歩くのみで行い、走らず安全に行うことが約束として決められていた。

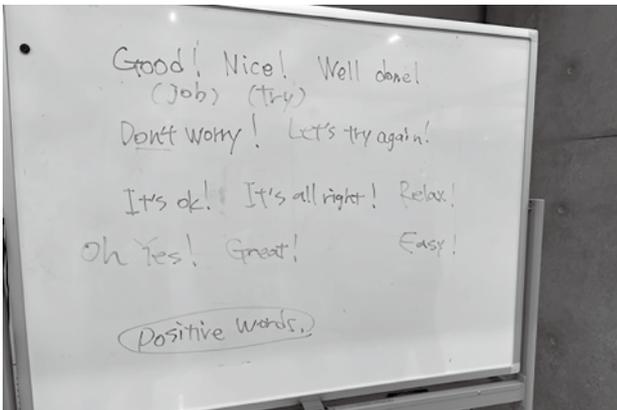
このセッションの最後には、Train Walk というところで、2人1組になり、後ろの人が前の人の肩を握り方向や進行をコントロールして歩き回るといったゲームを実施した。慣れてきたら前の人は目を閉じて行っていた。なお、安全面から前の人は常に両腕を伸ばして手の平を前方に向け歩くようにしていた。



Pipeline の実施風景

### 3) Pipeline

3種類の異なるハーフパイプを用いて、定められたゴールの箱にゴムボールを入れるゲームを実施した。一人一つハーフパイプを選び、まずはパイプの凹んでいる方を上にして、溝の中にボールを通してボールをゴールへと移動させた。制限時間は7分で実施した。次に、ハーフパイプを逆向きにし、凸の部分を上にした状態でボールをゴールへと移動させるようにルールが変更された。先ほどとは異なり、二人で協力してハーフパイプを組み合わせ、溝を作るようにしボールを移動させていた。制限時間は17分と先ほどよりも時間が延長され、ギリギリ成功して大いに盛り上がっていた。この際、ホワイトボードには Positive Words がいくつか記載され、参加者がその Words を多用できるよう配慮され、ゲームが行われていた。



Positive words の例

### 4) Duck hockey

最後のゲームとして、Hockey Game が行われた。ホッケイといっても、硬いスティックやパケットを用いるのではなく、ウレタン製のダックの形をしたスティックに代わるものと、プラスチック製の軽いボールを使用して行われた。

まずは、ダックスティックを使ってボール回し、真ん中にパスをカットする人を入れて取ら



Duck hockey の用具一式

れたり、ミスしたりすると交代というルール(鳥かご)で実施されていた。その後、前半後半4分の5vs5のゲームが開催された。交代要員はそれぞれ2名ずつで、適宜交代してよいルールで行い、白熱したゲームが展開された。なお、この Duck hockey に用いられた用具はすでに廃盤とのこと。報告者も欲しいと思ったぐらい、秀逸の用具であった。

### 5) Overall Reflection

全体の振り返りとして、ポストイットにそれぞれ思い浮かぶ Words を書き、ホワイトボードに掲載し、振り返りが行われた。参加者からは Positive な Words が挙げられていた。



振り返りの風景

## Ⅲ. 終わりに

英語で体育授業ということでのどのような授業になるか興味を持って参加した。特に、シンプルなルールのゲームやスポーツを用いることで、簡単な英語表現で実施することができることを感じた。また、山内先生から、こんな表現方法を使って伝えてみよう、例が出されるので、参加者の英語に対する敷居も大きく下がったと私は感じた。コミュニケーションツールである語学がスポーツと掛け合わさることで、新たな教養体育の価値が見出されたと、体育・スポーツの持つ力に気付かされた研修会であった。

## 実技研修 「太極拳」

【講師】樊 孟 (ハン モウ)  
 【場所】名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス マルチスタジオ  
 【参加人数】14名  
 【記録者】水野 貴正 (名古屋大学)

樊孟先生を講師にお招きし、太極拳を含む中国武術について講義と実技指導を実施いただいた。



樊 孟氏

### 1. 中国武術について

中国武術は日本では功夫(カンフー)と呼ばれることが多く、日本における相撲などと同様に中国の国技であることを最初にご説明いただいた。中国武術は内家拳と外家拳に大別され、太極拳は内家拳に、少林拳や長拳は外家拳に分類されることを説明いただき、その後、太極拳や長拳の動きを動画でご紹介いただいた。

### 2. 太極拳の体験

まず初めに中国武術における挨拶「抱拳礼(ほうけんれい)」を教えていただき、右手を拳、左手を掌(パーに近い形)にして胸の前で合わせた。この右手(拳)は武力を、左手(掌)は知識を意味しており、それらを合わせるという意味であることを説明いただいた。準備運動も日本の体育



の授業で一般的に行う準備運動とは少し異なる種目もあり、より柔軟性や筋力を求められる内容であった。その後、太極拳(24式)の1~3番(全部で24番まである)をご指導いただいた。太極拳の動きでは常に心臓に近い側から動かすこと、体重移動や骨盤の動きに注意することなどを各動作の中でご指導いただいた。参加者の方からは筋力、筋持久力、バランスなど様々な体力要素が求められ、想像していたよりもかなり運動強度が高かったとの声がありました。また、現在では太極拳というと公園で高齢者の方が行う運動というイメージを持たれ、動きの美しさが意識されていますが、太極拳はもともと実戦への応用を想定した動きであることを、実演を交えてご説明いただいた。

### 3. カンフー体操の体験

次にカンフー体操2の1~11番の型をご指導いただいた。カンフー体操は太極拳と異なり120%の力・スピードで強く・早く動かすようご説明いただいた。型に入る前に拳の握り方(親指を握らない)や掌の形(指を閉じたパーのような形)、拳の各部の呼称(拳心・拳眼・拳面)を説明いただいた。次に基本の脚型である馬歩(マブー)、弓歩(グンブー)を練習し、突きや蹴りなどを含む型をご指導いただいた。



カンフー体操の型にも実戦への応用があることを、実演を交えてご説明いただいた。先生の模擬演技で突きなどを見せていただいた際には、その鋭さに対して参加者の型から驚きの声があふれていた。

#### 4. 棒術の体験

最後に身長程の細長い棒を利用して棒術の体験をした。後ろ回し、前まわし、横回しと行い、速く回すには肘を動かさないこと、手の力の調節が重要であることなどをご説明いただいた。また、2人1組で組み手を行い、



事前に申し合わせたとおりに棒をクロスするように当てる練習をした。

#### 5. 終わりに

今回、全参加者が初めて太極拳やカンフー体操を経験されましたが、さまざまな体力要素を必要とすること、非常に強度の高い運動であることに驚かれておりました。今回の体験を通して、太極拳を含む中国武術を教養体育の種目として考えてみたいと興味を持っておられる参加者もいらっしゃいました。ご指導いただいた樊先生に改めてお礼を申し上げます。

### 実技研修 「カバディ」

【講師】河合 陽児（日本カバディ協会事務局長）  
 【場所】名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス 体育館  
 【参加人数】16名  
 【記録者】伊藤 智式（愛知学泉短期大学）

カバディはインドやバンラデシュなど、東南アジア諸国で伝統のある国技として親しまれているスポーツである。レイダーと呼ばれる攻撃者が相手の陣地に侵入し、アンティと呼ぶ防御側の選手にタッチして自陣に戻ると得点が入り、逆に侵入したレイダーがアンティに捕まえて自陣に戻れないと相手方に得点が入る。この攻撃者が「カバディ、カバディ、カバディ……」と発声し続けなければならないというルールがあり、これをマスコミ等で報道されたことから、コミカルで楽しそうな競技ととらえられているようだが、実際に行ってみると



河合 陽児氏

身体接触のあるかなりハードな競技である。

カバディは鬼ごっこラグビーのタックルを組み合わせたようなものであり、インドではプロ選手の試合が行われているようで、とても人気のあるスポーツのようだ。そして、この「カバディ」という言葉については特別な意味は無くかけ声のようなものらしい。





研修は日本カバディ協会事務局長で元日本代表の河合陽児先生と愛知県支部の選手の皆さんにご指導いただいた。

最初の準備運動では一般的なストレッチや体操に加えて、インド体操というものを実施した。これはラジオ体操のような徒手体操の形式で、少し複雑な手足の動きやジャンプ、独特のステップ動作なども含まれていた。この動きは、この後に行うカバディの動作に繋がるものでもあったし、体を器用に動かすためのスキルトレーニングの一つとしても利用できそうなものであった。

続いて、子どもの遊びの鬼ごっここのゲームを行った。これらは素早く動く、止まる、反転するなど子どもたちの運動能力の向上において有意義な運動である。カバディもそれに類似した運動であり、遊びを使ったトレーニングとして有効に感じられた。

そして、カバディの実技である。攻撃側のレイダー1人は最初7人いる相手側陣地に入り、相手のどこかにタッチし自陣に戻れば得点となる。足でタッチしてもよい。そして、この途中で相手に捕まってしまうと相手側に得点が入る。この時、タッチされたり、捕まえられたりした者はコート外に退場し、人数が減っていくことになる。攻撃側のレイダーは素早い動きが要求されるし、守備側は皆で協力してレイダーを捕まえる。ここで、守備側は2,3名で手を繋いでレイダーを取り囲む戦術を提案された。この手の繋がりは片方だけが手首を握る繋ぎ方であった。通常ヒューマンチェーンと呼ばれる手首同士を握り合う繋ぎ方ではなく、片方だけが手首を握るやり方であった。この理由はおぼろげに想像できるが、もう少し実践を積み重ねていけば納得のいく答えが出てくるものと期待する。

実践形式でのゲームを体験する中では、レイダーの動きを皆さんそれぞれが工夫されて試みておられたことに刺激を受けた。また、守備側ではチームとしての戦術的な取り組みもあり、このスポーツの奥深さを感じた。今回

は男女一緒にチームを編成したため、女性のレイダーを抱きかかえて捕まえることに躊躇する部分が見られた。ある時、逃げるレイダーの後ろ足を取って捕まえるプレーが出現した。皆さん感心しておられた。これなら躊躇なく女性のレイダーを捕まえられる。そこで講師の先生からは、片脚をつかむ、上げる、引っ張るという3つのステップで足取りの効果的な方策を教えていただいた。そして、レイダーや守備側、それぞれのプレーの見本をいくつか披露していただいた。

その後のゲームでは、チームそれぞれが力を出し合い、白熱しつつも楽しい実践が行われた。最後に指導者チームと研修者チームとの対戦を行った。指導者チームは4名であったが、さすがに強かった。まだまだ、奥の深いスポーツである。

実技を終えての質疑では、一般学生や子どもたちでも楽しめるようなルールのアレンジや安全性の課題についての話題がでた。参加された先生方にはもうすでにそれぞれのアイデアをお持ちのようであった。この研修を踏まえて現場でのさらなる実践を期待したい。

そして、ご指導いただきました河合先生、愛知県支部選手の皆さん、楽しい時間と新たな発見の場を作ってください、ありがとうございました。



## 実技研修 「タグラグビー」

【講師】鈴木 秀人（東京学芸大学）  
 【場所】名城大学 名古屋ドーム前キャンパス 体育館  
 【参加人数】18名  
 【記録者】千葉 洋平（岐阜薬科大学）

タグラグビーは、東京学芸大学の鈴木秀人先生を講師にお迎えし、名城大学ナゴヤドーム前キャンパスの体育館で、18名の参加者を対象に行われました。

初めにスライドを使った講義が行われ、ここではラグビーやタグラグビーの起源、我が国でのタグラグ



鈴木 秀人氏

ビーの普及の実態等の歴史的・文化的な背景について説明をして頂きました。その中では、そもそもラグビーのルールが、ボールを持って走ることが許され、得点もゴールエリアに走りこむだけという比較的難易度が低い設定になっていること。タグラグビーはそこからさらに、ラグビーで行われるタックル等のプレーを、タグというプレーに置き換えたことで、誰もが安全に行えるといった競技的特性を有していることが説明されました。

また、現在の大学生は、小学校でタグラグビーを経験している割合が高く、馴染みのあるスポーツであるため、大学体育の種目としても相応しいものであるといった点も教えて頂きました。

実技指導の前段では、タグ等の道具を購入する際の注意点、あるいはボールの空気圧といった授業を準備していく上でのポイントについて解説して頂きました。実技指導の中では、2人組でタグ取り鬼を行ったり、パスを受ける動きを身に付けるための3人組でのランニングパ



スライドでの講義の様子



実技指導の様子①



実技指導の様子②

ス等の練習が行われました。その後は、1対1でのトライ合戦が行われ、鈴木先生が技術や指導のポイントを練習を止めながら丁寧に解説して下さいました。

研修の終盤に行われた試合でも、攻め方や守り方についての助言をして頂きながらゲームが行われたことで、時間を追うごとに参加者の方の動きが上達し、試合のレベルが上がっていったように感じられました。また、試合の内容を見て、不足している技術を補うための練習を取り入れる必要性についてもご助言頂き、実際にパスの正確性を向上させる目的で、サークルパスや宝取りゲーム(ボール集め)が紹介され、参加者の方も楽しく練習に取り組まれていました。

こうした鈴木先生の研修を通して、学生が身体を動かす楽しさだけでなく、タグラグビーの技術を追求していく面白さも感じられるような授業展開ができるのではないかと印象を持ちました。参加者の方々が、それぞれの大学でタグラグビーを取り入れていく良いきっかけになったのではないかと思います。

## 実技研修 「ゴルフ」

【講師】近藤 年弘 (品野台カントリークラブ)  
 【場所】品野台カントリークラブ  
 【参加人数】8名  
 【記録者】伊藤 幹 (名古屋学院大学)

### I. はじめに

2024年8月21日。令和6年度大学体育指導者全国研修会2日目のAコースでは、ゴルフの研修が開催された。参加者は8名。講師には研修会会場でもある品野台カントリークラブの所属プロである近藤年弘氏が招かれた。近藤年弘氏は、1989年に日本プロゴルフ協会にてティーチングプロの資格を取得し、1998年にはトーナメントプレイヤーの資格を取得している。また、2016年には第12回PGAティーチングプロシニア選手権優勝という輝かしい実績を持っており、ティーチングプロとしても、プレイヤーとしても優れた講師である。



近藤 年弘氏

会場となった品野台カントリークラブは、愛知県瀬戸市にある1969年10月10日に開場された歴史あるゴルフコースである。瀬戸市は愛知県の北部、岐阜県との境にある土地で、古くから陶磁器やガラスの材料となる粘土、珪砂が産出され、やきものの町としても知られ、瀬戸物という言葉は全国的にも有名であろうと思う。また、品野台カントリークラブは、ゴルフコースとしても素晴らしいが、コースのいたるところにある表示板に特徴がある。これらはすべて職員の方の手作りということで、構内にある工房で作られており、職員の愛情、工夫が詰まったものであるということである。コース概要としては、レギュラーティーでは、Bグリーン全長6542ヤード、Nグリーン全長6255ヤードのPAR72の全ホール2グリーンの何度行っても別のゴルフが楽しみやすいコースとなっている。

### II. 研修内容

当日は朝7時に研修会のメイン会場である名城大学ナゴヤドーム前キャンパスに集合し、マイクロバスで移動した。早朝にも関わらず、参加者の皆さんは笑顔で談笑されていて、すでに楽しくなる雰囲気が感じられた。

品野台カントリークラブ到着後、8時40分より打撃練習場にて、近藤プロの紹介後、ドライビングレンジでの

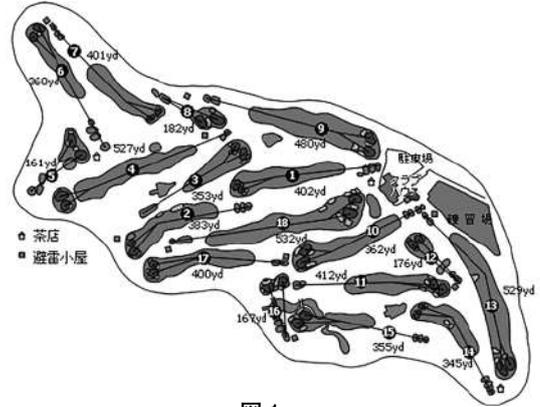


図1

個別レッスンを実施した。

プロは日頃どのようなミスショットが多く出るかを受講者のスイング観察から的確に指摘しており、普段のプレイ経験から指摘された内容に実感を持ち、研修を受けていた様子がうかがえた。

次にラウンドレッスンでは、スイングの細かいことを



図2



図3

注意したりなどはせず、楽しくラウンドすることを主に実施された。受講者はプロのショット見て、打球の質が全く違う事に驚いているようであった。どのようにボールを捉えているのか、という質問が多かったようで、近藤プロはヘッドのボールに対する入射角や、正しい入射角でボールを捉える練習方法などについても説明していた。受講者は、驚愕の事実を知ったように感心していたようであった。

今回はラウンド自体まったくの初めて、という初心者の受講者もいたが、受講者どうしで、または近藤プロ、実行委員もサポートしながら初ラウンドを楽しんでいたようであった。しかしながら反省点として、ゴルフというスポーツは、コースによっては、来場、プレイする際の服装の規定が厳しかったり、自分で持ってこなければいけない物があったりと事前準備が必要なスポーツであることを初心者の方にお伝えすることを失念してしまい、ご不便をおかけしてしまった。自分が初心者であった時

のことを思い出してご案内すべきだったと反省し、本当に申し訳なかったと感じている。

また、今回の研修会は、東海地区大学ゴルフ研究会との共催ということで実施されたため、全国大学体育連合の研修会受講者のみのラウンドではなく、研究会に参加している大学教員とも交流が生まれ、より良い研修会になったのではないかとと思われる。

### Ⅲ. おわりに

お忙しい中快く講師を引き受けていただいた講師の近藤年弘プロ、担当していただいた品野台カントリークラブの河村さん、また事前の準備段階においてこちらの不手際で複数回にわたるメールのやりとりをさせていただいたにもかかわらず、すべて迅速に対応してくださった受講者の皆様には、この場を借りて御礼を申し上げます。皆様、研修会の開催に際して多大なるご協力をいただき、誠にありがとうございました。



図 4



図 5

ワークショップ「スポーツにおける暗黙知」 \* 講演後、参加者によるグループワーク

【講師】 鈴村 裕輔 (名城大学)  
 【場所】 名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス DW-207室  
 【参加人数】 22名  
 【記録者】 冨岡 徹 (名城大学)

1. はじめに

本研修会で掲げた「大学教育・大学体育と国際化」の大テーマの下で、「スポーツにおける暗黙知」を探り共有することを目的としてワークショップを開催した。講師には名城大学外国語学部の鈴村裕輔先生をお迎えし、このテーマについて



鈴村 裕輔氏

ご講演頂いたのちに、参加者がグループに分かれ、ディスカッションを行った。先生は、名城大学で「国際日本学」という交換留学生に日本について紹介する授業を日頃担当されている。また、2009年4月より『体育科教育』（大修館書店）に「スポーツの今を知るために」を連載し、スポーツを取り巻く様々な出来事を社会、文化、政治などの多角的な視点から分析し発信されるなどスポーツにも造詣の深い方である。

以下に具体的な講演内容とディスカッションのポイントについて紹介する。

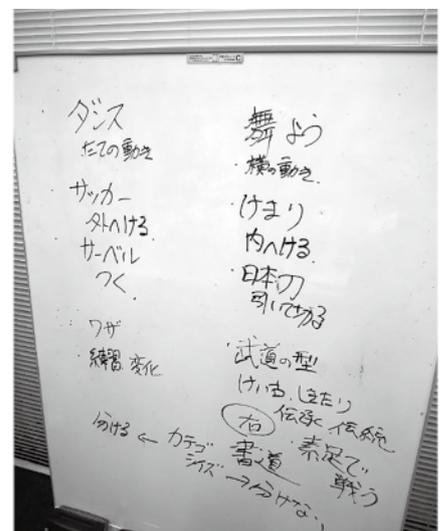
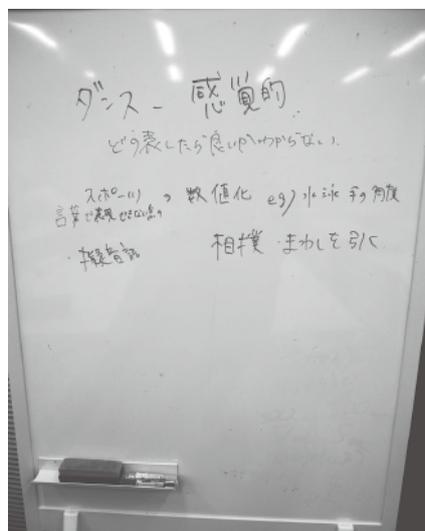
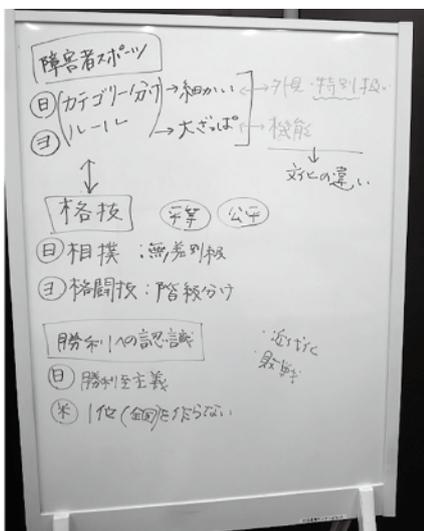
2. 研修内容

(ア) 講演

まず初めに、「暗黙知」とは何か、体育科教育におけ

る「暗黙知」の重視について解説があった。暗黙知(tacit knowing/tacit knowledge)とはマイケル・ポラニー (Michael Polanyi, 1891-1976)の用語で、①言語化を拒む、あるいは言語化以前の知、②科学的、客観的な知の前提となる主観的な知、との定義が提示された。そのうえで、体育科教育における位置づけについて解説があった。一例として、『中学校学習指導要領解説保健体育編』（2008年）において、「知識については、言葉や文章など明確な形で表出することが可能な形式知だけでなく、勘や直感、経験に基づく知恵などの暗黙知を含む概念であり、意欲、思考力、運動の技能などの源となるものである。」の記述がある旨紹介された。加えて、特に身体活動においては、「形式知」のみに依存できない特殊性についても言及があり、体育・スポーツにおける「暗黙知」理解の重要性について指摘された。

続いて、「身体と文化の関係」に関する論点より話が進められた。まずは、身体の使い方について、日本とヨーロッパの差異が紹介された。身体の使い方は、文化的背景により異なるもので、日本では、よりよい結果を得るために人間が労力を惜しまずに投入することに特徴があることが指摘された。また、人間の巧みさや器用さによって、単純な道具を有効的・多目的に使いこなすことも特徴的であるとのことであった。一方で、西ヨーロッパでは、可能な限り人間以外の労力を利用して、よりよい結果を



得られるように道具を工夫する点が特徴的であるという対比を示された。これは、誰が行っても同じような結果が得られるよう道具を工夫することを意味するものである。筆者は、以上のことから日本人の巧みさ・器用さの所以について理解を深めることができた。

さらには、日本と西ヨーロッパにおける衣服や履物に関する差異について説明があった。和服では、個人の体格に合わせて着方を調整したり、履物には左右の差がなく両足での共有が見られたり家族間で共有したりと、モノに人間が合わせていくという特徴を興味深く耳にした。確かに、先生が指摘された通り西洋では個人に合わせてドレスを縫製したり、さまざまなサイズの靴を作り履いたりということと照らし合わせると納得のいくものであった。

次の話題は「ウチとソト」というテーマであった。わが国において、客人を家へ招き入れる際、「お上がりください」というのは、高床式住居から現在に至る土間、玄関という少し高くなっているところが意識され、「上がる」と言うことに共感した。一方で、西洋文化では、そのような高低差は意識がなく、「入る」ということも納得できた。

このような観点で、日本と西ヨーロッパを比較して、次なる話題に進んだ。日本では「求心性」の態度をとり、西ヨーロッパでは「遠心性」の態度をとるということであった。てんぶらは「あげる」と言い、浸して引き上げる(揚げる)まで、出かける際は「行って来る」と自身に戻って来ることを強調するという指摘に共感した。日常生活用の器具も鋸や鉋などで自身の側に引き付けるよう使用するものとして発達した。住所の記載方法にもこの求心性と遠心性の感覚は見られるほか、(日本の)武道と(西洋の)スポーツにおいてもこの感覚の違いがみられるのでは

ないかという指摘があり、レクチャーは終了した。

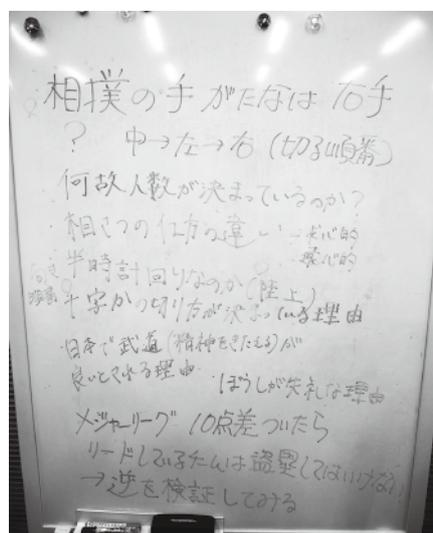
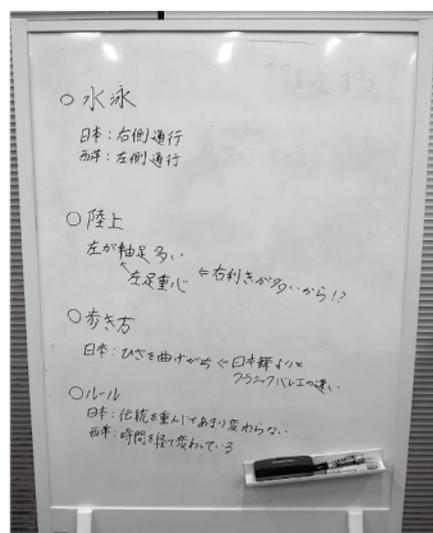
### (イ)グループワーク

グループワークに先立ち、ファシリテーターとなった筆者が趣旨説明を行った。はじめに、西洋文化として日本に導入されたスポーツは、日本の伝統的な考え方(日本人としての「暗黙知」とどのように関係を保ちながら発展してきたかなど、参加者の経験談を共有することを目的とすることを説明した。そののちランダムに5グループに分かれ、グループワークを展開して頂いた。

内容は多岐にわたり、まとめることは難しく、理解を深めることを目的に配置したホワイトボードの写真を提示する。筆者はグループワークに適宜加わり、議論を促しており、グループワークのスナップショットを撮影し忘れてしまったことをお詫びしたい。

筆者が興味深いと感じた論点を以下で紹介したい。

- ダンスでは縦(上下)の動きが強調されるが、舞踊では横(左右・前後)の動きが中心である。(注：日本舞踊では地面から飛び上がる動きは皆無であると読んだことがある)。
- サッカーと蹴鞠、サーベルと刀で、確かに「求心性」と「遠心性」の違いがみられる。
- 水泳競技で、練習中1コース内で往復する際、日本では左回りでターンするが、南半球では右回りでターンしていた。これは「コリオリの力」によるものではないか。
- 大リーグでは10点差がついたらランナーは盗塁をしないという「暗黙の了解」がある。卓球では、中国が強くなってから相手を零点のままでも勝つことは「掟破り」だとされている。
- 「暗黙の了解」と「暗黙知」はニュアンスが違うものではないかという指摘があった。



### 3. 終わりに

日本と西洋文化の違いに造詣の深い鈴木先生の話から、スポーツにおける暗黙知を感じる良い機会となったのではないかと感じている。自身の専門とするスポーツ種目とそれ以外の種目との共通点や、他種目の特徴など日常考える機会のない話題ではなかっただろうか。スポーツにおいて当然とされるルールは、西洋人の「暗黙知」に基づくものと考えたことで、スポーツをさらに理解する機会となれば幸いである。

**実技体験**  
「車いすハンドボール」

【講師】岡田 美優(早稲田大学大学院、一般社団法人 Knocku)  
【場所】名城大学 名古屋ドーム前キャンパス 体育館  
【参加人数】29名  
【記録者】千葉 洋平(岐阜薬科大学)

車いすハンドボールは、早稲田大学大学院に所属され、一般社団法人 Knocku の代表である岡田美優先生に講師を務めて頂きました。会場は、名城大学名古屋ドーム前キャンパスの体育館で、ご参加は29名でした。



岡田 美優氏

冒頭では、岡田先生より車いすハンドボールの競技特性についてご説明頂きました。そこでは、車いすハンドボールが身体の障害の有無や年齢、性別に関係なく誰もが共に参加できるスポーツであることを話して頂きました。その理由として、ボールが小さく膝にのせることができ、ボールを持ちながらの車いす操作が比較的簡単であることや、ゴールも大きめで、他の車いすスポーツ競技と比べ成功体験を得やすいことが挙げられていました。

今回の研修は、車いすハンドボールのルールを理解と指導法の習得が目的とされ、スポーツ用車いすの操作スキルから、車いすハンドボールの基本の動きの練習、試合の実践といった流れで行われていきました。

車いすの乗り方と操作方法の説明では、乗る上での注意点や乗る際の姿勢、ブレーキやターンのやり方についての説明が行われました。また、ゴールには高さ制限をするためのバンドも取り付けられ、車いすハンドボールの場づくりに対するアドバイスもされていました。

その後、車いすを使った氷鬼が行われ、3分以内に鬼が全員を捕まえることを目指して楽しく準備運動が行わ

れました。スポーツ用車いすに今回初めて乗られる参加者の方も少なくないようで、操作に苦勞されながらも、車いすで動く面白さを経験されていたようでした。

基本の練習では、2人1組になり、向かい合っのパス練習が行われ、その後2箇所に分かれて、1人2本ずつシュートを打つ内容が行われました。そしてルール説明の後、1試合4分間のミニゲームに移りました。試合の中で参加者の皆さんは、車いすの操作や車いすに乗りながらのパス交換に次第に慣れていき、活気のあるプレーが多くみられ流ようになっていきました。ゴールが生まれる度に大きな歓声も沸き、車いすハンドボールの楽しさを十分経験されたように思います。スポーツを通した共生社会の実現が求められている中、参加者の皆さんには、車いすハンドボールの魅力や可能性が、ご理解頂けたのではないかと思います。今回の研修が、それぞれの大学での授業や地域貢献等の活動に繋がっていく可能性を感じることができました。



試合の様子①



指導の様子



試合の様子②

## 実技体験 「車いすバドミントン」

【講師】 兒玉 友(日本福祉大学)  
【場所】 名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス 体育館  
【参加人数】 36名  
【記録者】 伊藤 智式(愛知学泉短期大学)

参加者の皆さんはこの講座の前に行われた車いすハンドボールにて、すでに車いすの基本的な操作や留意点は体験済みであった。

車いすに乗ってのバドミントンの前に、まずはバドミントンのラケット、シャトルに慣れるという意図で立位でのストロークでラリー

を行った。参加された皆さんは授業等でバドミントンの経過のある方が多く、比較的スムーズにラリーを行っておられた。続いて、車いすに座ってのラリーの体験となるが、ラリーの相手は立位の状態の方とした。車いすに座った状態でのラケットの操作はなかなか難しいようであったが、車いすの移動が無くても座った状態でラリーをしやすい所にシャトルが飛んでくる。立位の方のやさしい心配りがあり、皆さん楽しそうにプレーをされていた。



兒玉 友氏



車いすバドミントンはラケットを持ちながら車いすを操作し、移動してラケットでストロークを繰り返さなければならない。兒玉先生からは、ラケットを持ちながら両手で車いすを操作する手法をご指導いただき、現役の選手である関本さんには実際の動作を実演していただいた。

車いすバドミントンで使用する車いすは日常用のものとは違いタイヤはハの字に開いている。タイヤの外側にはハンドリムと呼ばれるリングが付いており、これを回して左右の車輪に動力を伝える。その力の向きや加減に

より前進後退や方向転換が可能になる。平行した二輪であるため、左右を逆方向の前後に回せば、その場での回転が容易にできる。これらの操作はラケットを持ちながら行うことになるが、片手だけの操作では車いすを自在に動かすことは難しい。よって、利き手でラケットを持ちながら左右それぞれの手で車輪の操作をすることが要求される。シャトルを打った後はすぐにハンドリムに手を置いて、次の移動に備えなければならない。これらの操作については、ハンドリムとタイヤと一緒に持つようにすると良いとご指導を受けた。

車いすバドミントンでは、通常でのサービスラインの前方のネットに近いエリアはコート外となり、さらに、シングルスでは通常の縦半分がコートになる。したがって、車いすに乗ってのプレーヤーは前のエリアが狭くなるものの縦は半分のエリアとなるため、左右の動きよりも前後の動きが要求される。

この縦の動きを素早く行うために、車いすを転回させずに前進と後退の操作が重要になる。前後に動いてシャトルを打ったらすぐに両手でブレーキ、そして、次に備える。この時に前に動いてブレーキならば上半身を後に傾けて後ろ重心で後方に戻る。この前後の動きのお手本を関本さんに見せていただいた。また、通常のバドミントンのストロークでは肩をローテーションして行うことが多いが、車いすではこれを使うと車いすも回ってしまうので、できる限り上半身を正対し動かさずにストロークして前後の動きにそなえる。この動作はなかなか難しそうであった。

この後、ネットを挟んでの試合形式での体験となった。



車いす1人と通常立位1人のペアでのゲームや立位を2人にしてトリプルでのゲームを行った。ネット際のエリアがコート外になることや、立位のプレーヤーと一緒に



行うことで、ラリーも十分に続いており、皆さん楽しくプレーをしておられた。車いすの代わりにキャスターのついた椅子に座ってバドミントンをすることも出来るという話もあった。いろいろな工夫をして、車いすの方と健常者が一緒に楽しめるスポーツであることが体感できた。

ご指導頂いただいた兒玉先生からは、大学での実践としてこの競技をアレンジして、どのように工夫したら良いかという意図が感じられ、その方策の幾つかをご教示いただきました。的確に分かり易く、楽しくご指導いただき感謝申し上げます。そして、関本さんからは貴重なお話を伺うことができました。また、明るく楽しくご指導いただきました。ありがとうございました。